資料１

病院の役割と今後について

病院名：綾部市立病院

①自施設の現状及び課題

開院当初から地域における急性期の基幹病院として発展してきたが、それぞれの地域に応じた医療の提供体制の構築や地域における機能分化が進められる中で、平成28年には206床のうちの50床を回復期の性質を持った地域包括ケア病床へ機能変更を行い、一部回復期機能を有する一般急性期病院となっている。

また、医療スタッフの養成、確保対策として積極的に臨床研修医を受け入れるとともに京都府立医科大学の教育指定病院として医学生の臨床実習教育にも力を注いでいる。また、看護師、コメディカルについても各種養成機関の実習指定病院となり積極的に学生実習を受け入れている。加えて、更に質の高い医療・看護の提供ができる地域中核病院を目指し、積極的に様々な研究・研修活動を行っている。

しかし、平成22年度をピークとして年々常勤医師が減少し、地域医療の確保、救急医療体制の維持がかなり厳しくなっている。綾部市唯一の公立病院・救急告示病院として、今後も安定した病院運営を遂行していくためには医師確保が最重要・最優先課題である。

病床数（30．4．1）

合計	一般					療養			精神	結核	感染症
	小計	うち 回復期リハ	うち 地域包括ケア	うち 障害者施設	うち 緩和ケア	小計	うち 回復期リハ	うち 介護療養			
206	206		50								

病床機能（平成29年度報告分）

全体	高度急性期	急性期	回復期	慢性期
206		156	50	

②病病連携、病診連携、医療介護連携等の取組及び課題

当院は綾部市の中核的病院として、病病連携・病診連携及び介護施設などと緊密な連携を図り、地域住民の医療確保を図っている。

現在、市内の民間2病院とともに、外来診療のほか入院医療を担っており、特に救急医療・急性期医療をほぼ一手に担っているところである。地域の病院・医院からの紹介患者の受け入れや逆紹介の推進、定期的な合同カンファレンスを通して連携強化に努めている。また、医師不足に伴い、地域の病院との機能分化及び相互連携を図り、地域医療を確保している。また、退院支援においては、専門スタッフが退院先の調整や在宅での療養環境などについて十分相談に対応している。

しかしながら、在宅における介護者不足や周辺地域の介護施設に空きが少ないため退院調整に苦慮している。そのため、入院が長期化したり、地元から離れた施設への退院を余儀なくされる場合も多い。

地域包括ケアシステム構築に向けて、限られた医療資源の中、在宅医療を担う診療所（訪問診療）、訪問看護・訪問リハビリと介護施設・介護サービスとの連携を密にすることが重要であり、今まで以上に連携や調整を図ることが重要である。

③地域において今後担う役割

綾部市の全域と隣接市町の一部を診療圏とし、少子高齢化が進行する地域にあって、「救急医療体制の充実」「生活習慣病への対応」「癌の診断と治療」「新生児から高齢者医療への対応」「地域医療連携推進」を病院の基本運営方針に掲げ、急性期の地域中核病院としての役割を担ってきた。

今後も基本運営方針に沿った役割を担っていくとともに、住民ニーズに応じた機能を有する病院運営を行っていく。

④今後の展望

地域環境としては、今後ますます少子高齢化及び人口減少が見込まれ、また、医療環境としては、医師不足や周辺医療機関との機能分化の更なる推進が予想される。このような中でも地域が必要する医療ニーズを的確に把握し、公立病院としての使命と地域中核病院としての役割を果たしていく必要がある。

病院の役割と今後について

病院名：京都協立病院

①自施設の現状及び課題

・医師体制の問題により、救急告示を取り下げ（H26年4月）ており、地域の医療機関及び患者さんにご迷惑をおかけしている。医師確保は引き続く課題である。
・社会的に困難な患者が多く、退院調整に苦慮することが少なくない。
・H26年度、一般病棟に地域包括ケア病床を導入し、療養病棟は回復期リハビリテーション病棟とする等、大きく機能転換を行い、現在のかたちとなった。

病床数（30．4．1）

合計	一般					療養			精神	結核	感染症
	小計	うち 回復期リハ	うち 地域包括ケア	うち 障害者施設	うち 緩和ケア	小計	うち 回復期リハ	うち 介護療養			
99	52	0	34	0	0	47	47	0	0	0	0

病床機能（平成29年度報告分）

全体	高度急性期	急性期	回復期	慢性期
99	0	0	99	0

②病病連携、病診連携、医療介護連携等の取組及び課題

・脳卒中、大腿骨頸部骨折パスの運用率が全国的にみて適正かどうか。
・社会的困難な方は特に、入院前の包括的な情報共有が欠かせない。

③地域において今後担う役割

・引き続き急性期から在宅への橋渡し役として、ポストアキュート、サブアキュート、レスパイト入院、リハビリ入院などの診療の質向上。
・社会的困窮者に、より手厚い体制とステークホルダーとの密な情報共有で、より充実したサポートを提供できること。
・高齢者、認知症患者に対して、質の高い医療提供ができることと、その体制づくり。

④今後の展望

・地域のニーズに応じて外来、在宅、入院のサービス内容の多様化、拡充を図りたいと考えている。
・地域完結型の医療、介護を実現するために包括的な情報共有のシステムが望まれる。

病院の役割と今後について

病院名：綾部ルネス病院

①自施設の現状及び課題

資格者の確保が課題

病床数（30．4．1）

合計	一般					療養			精神	結核	感染症
	小計	うち 回復期リハ	うち 地域包括ケア	うち 障害者施設	うち 緩和ケア	小計	うち 回復期リハ	うち 介護療養			
86	86			43							

病床機能（平成29年度報告分）

全体	高度急性期	急性期	回復期	慢性期
86		86		

②病病連携、病診連携、医療介護連携等の取組及び課題

京都ルネス病院との連携が多い

③地域において今後担う役割

脳神経外科・神経内科の常勤が勤務している為、脳に特化した病院。

また、地域にはない障害者病棟があるので、人工呼吸器等、重症患者の受入れ

④今後の展望

現状維持